

歎異坊の伝親鸞作太子童子像



歎異坊



親鸞作と伝わる聖徳太子童子像

「童子像の発見」

20年ほど前、同じ敷地にある毘沙門堂の毘沙門天像を東京芸術大学の教授に見ていただいた時のこと、歎異坊の中の物を見せてほしいとお願いされたが、ガラクタだらけと思っていた鉾田さんは、渋々お堂の中のものを、ほこりを払い、一つひとつ縁側へ持ち出した。とこ

ろが教授は、その中の童子像を手にし「これはすごいものが出来た」と驚いたそうだ。

制作は平安末から鎌倉初期とのこと。高さ33cm程の桧材一本作り。髪を二つに丸く結んだ姿で、素朴な作りである。像の背面には微かに「太子 親鸞作」と墨書銘（写真参照）があり、聖徳太子の童子像であることが推測される。また後日、詳しく鑑定したところ、側面には「南無阿弥陀仏」と名号があり、衣の彩色の跡も確認されたとのことだ。

「親鸞聖人と聖徳太子」

真宗の寺院には、必ず聖徳太子の絵像や木像が安置されている。それは親鸞聖人が「^{わこく}和国の^{きょうしゆ}教主聖徳皇」「^{しやうとくおう}大慈救世聖徳皇 父のごとくにおわします」（皇太子聖徳奉讃）などと和讃され、聖徳太子がいたからこそ仏法に出あうことができた^とと尊敬し、親しまれたことによる。

聖人は29歳の時、六角堂において聖徳太子の夢告を受け、比叡山を捨て法然上人のもとへ行かれたと伝えられているなど、青年期から晩年にかけて、大きな決断の時に聖徳太子の夢告があったことが多く記されている。

また、聖人が関東に来られた理由の一つとして、

稲田の西念寺の裏手、鎌倉時代に、稲田・福原を治めた稲田氏の居館跡と伝えられ、堀ノ内の地の名が残る集落がある。その奥の谷間、北側にある石段を十数段上がったところに歎異坊（丹入坊）と呼ばれる松材作りの、大変古く小さな念仏堂がある。

ここには親鸞作と伝えられる童子像など、沢山の宝物が集落の人の手によって守られている。

我々は、集落で組織されている「上稲田文化財保存会」会長の鉾田瑞穂さん、副会長の柳橋さん、市村さんから、土地の歴史や童子像について詳しくお話しをお聞きし、笑みを浮かべた童子像をお参りさせていただいた。

集落は真宗門徒ではなく、また、歎異坊の由来や、親鸞聖人に所縁があるとの伝えはない。4～50年ほど前までは、ここで念仏のお講が勤められていたが、その後は誰もお堂に入ることはなくなり、荒れ放題となっていた。

現在は、少しずつ修復され、昨年10月には痛みの激しい屋根と基礎を修復された。しかし、大変古く立派な木造の阿弥陀如来は、未だ手つかずの状態、維持管理のご苦労が偲ばれた。

当時の関東では太子信仰が盛んで、聖徳太子を慕う民衆が多かったからではないかともいわれている。

「稲田草庵」

親鸞聖人は20年もの間、関東に滞在されたため、聖人草庵跡と伝えられる所が各地にある。その中でも、本拠地にされ『教行信証』の制作に取りかかれたのが、この稲田である。

稲田の草庵は、吹雪谷という谷にあったと伝えられているが、その正確な場所は分かっていない。しかし、歎異坊の近辺にあったことは確かである。

この童子像は親鸞聖人が作られたものか確証はないが、聖人が長く生活をされたこの地、その時代に作られ、今も手を合わせることが出来ることに、感動を覚えずにられない。

もしかすると、聖人もこの童子像に手を合わせ、数々の課題に向きあわれたのかもしれない。

歎異坊は、西念寺と稲田神社の中間にある細い路地を入った集落の奥にひっそりと建っている。



「歎異坊」保存会の方からお話を聞く



上／歎異坊の荘厳
左／歎異坊の「涅槃図」
幅11、高さ2メートル程の掛け軸



上／歎異坊の梁（彩色が施されている）
左／お堂の西側には六字名号や「法名釋敬立」と刻まれた石や古い墓石などが沢山ある。